
ブラザーシップ

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザーシップ

【Nコード】

N6395N

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

中学1年生の思春期の少女のうちに新しいママとヲタ系アキバ男が同居する？今更そんなこと言われてもあたし困るんですけど。

親同士の再婚で多感な中学生と同居することになった透は、家族の為に強行手段を取るが・・・。

先に書いた「インパラの涙」の番外です。

第1話（前書き）

前に書いた インパラの涙の番外です。

こっちから読んでも大丈夫ですが、どっちも読んでね。

（^^）

第1話

「恵理花、こちらがお前のお母さんになる香坂あゆみさん、と息子さんの透君だ。」

透君は成績優秀でこっちの私立高校にすることになってる。お前も見習って勉強教えてもらいなさい。」

ホテルの屋上のレストランで、あたしは「新しい家族」と対面した。

「よろしくね、恵理花ちゃん、娘がずっと欲しかったから嬉しいわ。」

40代くらいの小柄な女性がにつこり笑った。

む、確かに半端なく美人だ。

さすが、コブツキなのに　うちのパパが釣られただけはある。でも、こんなでかい子供がいるとは正直思ってたぞ。

「よろしく、恵理花ちゃん。透です。」

今時ありえない銀縁ビン底メガネに真っ白な顔。

ヘアスタイルもあるがままって感じ？

もゝほぼアキバ系じゃん。

しかも頭いいときた。

なんかム力つくんですけど。

「はあ、よろしくです。」

あたしは上目遣いにちらりと二人を見比べ、目の前のジュースをストローで吸った。

パパはこのおばさんと入籍して、うちにこの二人を連れてくるらしい。

中学１年生の女の子と、このアキバ系高校生が一つ屋根の下で暮らして心配しないのか？

パパがどうでも良さそうなたたしの態度を見てヒヤヒヤしている。何とか場を盛り上げようと話を引っ張ろうとしてるんだけど、それがバレバレでサマイ。

「入籍は来月だが、引越しは来週にはすることになっている。二人とも再婚同士だし、挙式はせず旅行にでも行って済まそうと思ってるんだ。恵理花も仲良くやってくれよ。」

・・・どうでもいい情報。
もーなんか疲れてきた。

あたしは椅子から立ち上がった。

「もういいでしょ？来週引っ越してくるなら後はその時で。あたしはここで失礼します。」

きれいなおばさんはびくくりして立ち上がろうとしたが、あたしは気にせず出口に直行した。

.....

予告どおり二人は次の週あたしのうちに引っ越してきた。

母子家庭で貧乏だったのか、荷物なんてたいしてなかった。

あたしのうちは自慢じゃないけど、まあでかいし個室も余ってたから二人増えても平気なんだけど。

でも、アキバ男がアブナイ奴だったらどうすんだろ？

ソファに寝転んでゲームをしながら、あたしは二人が荷物を搬入するのを横目で観察する。

「恵理花ちゃん、今日からよろしくね。」

きれいなおばさんがあたしに気をつかって挨拶にきた。

気にしなくてもいいのにマジウザ。

「はあ、よろしくです。」

ソファに足を投げ出したまま、あたしは立ち上がりもせず返事した。おばさんは少し困った顔をしてダンボールを運んでいるアキバ男のところに戻った。

ちよっとかわいそうかな。

てか、あたしが気遣ってるし。

なんかめんどくさくなって、あたしは自分の部屋に引っ込んだ。

自分で思っただけど、あたしを含めて世の中には産まれた場所を間違った人がいる。

あたしの家はパパが会社の重役だったから、生まれたときから物に

は困ったことがない。

欲しいものは何でも買ってもらえたし、習い事もなんでもやった。

でも、それって猫に小判だ。

あたしは頭が悪くて、何を習っても続かなかった。

大好きだったママは3年前、家を出てった。

パパが仕事ばかりで寂しかったって、ドラマでよくある台詞を泣きながら訴えてた。

つまり、昔つきあってた人と浮気してしまったのはパパのせいだと言いたかったみたい。

ママは最初あたしを連れて行きたがったけど、あたしが断った。

何でかって、相手の人が好きになれなかったから。

連れ子に性的虐待なんてよくあるしね。

ママは最初の一年は連絡くれたけど、それからぱったり止んだ。

「恵理花の妹ができたのよ。」

電話越しに聞いたママの最後の言葉がこれだ。

幸せそうに言われたって、リアクションに困るって。

「はあ、おめでとう。」

そういつてあたしは電話を切った。

何が言いたいかっていうと、あたしみたいにバカで何にもできない、でもママの愛だけは必要だった子が重役でお金持ちのパパのうちに生まれたのは 猫的には小判だ。

おまけに近所でも有名なお金持ちのうちだから、ママが男と出てった噂は学校にも広まって、あたしはすっかりイジメの対象だ。

もとからやつかまれてたんだけどね。
だから、バカな子にお金なんていらなかったんだって。

反対に賢く生まれて、お金さえかければ色んな才能があるだろう子がテレビでよくある大家族のうちに生まれちゃって、中卒で新聞配達やってる現実。

世の中って不公平だ。

あたしはベッドに転がってさっきのゲームの続きを始めた。

.....

ドアをノックする音で目が覚めた。
ゲームしながら寝てしまったらしい。

「恵理花ちゃん、ご飯だよ。」

聞きなれない男の声？

あ、アキバ男だ。

でも、意外に低くていい声してんじゃん。
顔が見えなければ。

あたしはしぶしぶドアを開けた。

想定どおり、銀縁メガネのアキバ男が立っていた。

「今日は初日だから皆で一緒に食べようって、お父さんが言ってる。
寝てた？」

は？お父さんて・・・。

もう順応してんのか、こいつは。

「分かったよ。今行きますよ。」

なんか不愉快だ。

あたしは露骨に嫌な顔をして、アキバ男を残して階下に降りた。

「では新しい家族を祝って乾杯。」

パパがビールのグラスを上げる。

もくそういうの恥ずかしいしやめて欲しい。

ダイニングテーブルにはきれいなおばさんの手料理が所狭しと並んでいる。

張り切って作ったに違いない。

「恵理花ちゃん、どんどん食べてね。おかわりあるから。」

おばさんが取り皿にサラダを分けてあたしの前に置いた。

むむ、ム力つくけど料理は上手い。

「透君はいけるクチか？今日はオレが許す。どんどんやろう。」

すでに出来上がったちゃってるパパはアキバ男のグラスにビールを注ぐ。

「あ、頂きます。」

グラスに手を添えてビールを受けるアキバ男。
おいおい、高校生だろ。

「まあ、あなた。透はまだ未成年ですよ。透もなあに？いつも飲んでるみたいじゃない。」

おばさんが慌てて突っ込みを入れる。

「いいじゃないか。オレが高校の時は酒もタバコも二十歳で卒業してたさ。」

どんな高校生だ？

パパはすこぶる機嫌がいい。

もしかしたら、パパも出来のいい息子ができて嬉しいのかもしれない。

このアキバ男こそ、母子家庭じゃなくて最初からここに生まれてたら良かったのにね。

あたしはなんだか胸が詰まって、箸を置いた。

アキバ男がちらりとこちらを見る。

それが何か勝ち誇った感じに見えて、あたしは立ち上がった。

「ごちそうさま。」

テーブルの三人はきよとんとして立ち上がったあたしを見上げた。
やがてパパが口を開いた。

「恵理花、何か言いたいことがあるなら・・・。」

もう、そういうのがムカつくの〜！

「なんでもない！今日、生理なの！」

私は言い捨てて、階段を駆け上がって自分の部屋に駆け込んだ。

第2話

またそのまま寝てしまったらしい。

時計を見たら11時だ。

なんかいつも寝てるなあ、あたし。

9月になったとは言え、まだまだ暑い。

汗でシャツが湿っている。

あゝエアコンのタイマー切れてるし。

あたしは再びエアコンのスイッチを入れるとシャワーを浴びに階下に下りた。

ダイニングはもうきれいに片付けられていた。

お腹減ったんだけど、もう何もなかった。

残念。

今までは家政婦さんがきてたけど、これからはあのおばさんがやるんだろな。

あたしが我儘ばかり言うから家政婦さんも随分変わった。

平均して半年周期。

おばさんはいつまでここにいられるかな？

バスルームに入って汗でべたつくシャツを脱いだ。

レギンスもべっとり足にくっついて気持ち悪い。

裸になって浴室に入ろうとした時、ドアが突然開いた。

湯気の中から現れたのは……。

目の前に、裸のアキバ男が立っていた。

「ギャー！！！！！」

あたしは大声を上げて壁にかかっていたバスローブを体に巻きつけた。

何このマンガみたいな展開？

しかも見られた。アキバ男に。

「う、ごめん。」

アキバ男は慌ててドアを閉めて浴室に引っ込んだ。

ごめんで済むか。

少女の裸見について！

あたしの声でパパとおばさんがバスルームに飛び込んできた。

「どうした？恵理花？」

「どうしたの？」

「どうしたじゃないわ。あんたの息子に見られたのどうしてくれるのよ。」

あたしはもう何に対して怒ってるのか分からなくなっておばさんに怒鳴った。

「と、透？あんたまさかお風呂覗いたの？」

おばさんは顔面蒼白になって浴室に飛び込む。

中からアキバ男の悲鳴が聞こえた。

「ちょ、ちよっと、おかあさん、入ってくるなよ。」

「あんた、女の子のお風呂覗くような子に育てた覚えありません！」

「この場合、覗かれたのはむしろオレでしょ？ちよっと、風呂ん中まで入ってこないで！」

「いいから出てきなさい！」

「出るからタオルくれよ。お、落ち着いてくれって。」

アキバ男はバスローブに包まって小柄なおばさんに引きずられるように出てきた。

「恵理花ちゃん、ごめんね。」

おばさんに小突かれ、半ば呆れた顔でアキバ男もあたしに頭を下げた。

パパは成す術もなく呆然としている。

・・・てか、なんであんたらが謝るの？

状況見れば、偶然鉢合わせしたんだって、普通思うでしょ。

その気の遣いようと、腫れ物に触る感じがム力つくんだって何で分かんない？

ヤバ・・・。

なんか涙出てきた。

「だ、だから嫌だったのよ。い、今更、新しい家族なんて。新しいママなんて無理だし。あたし要らないよママなんて。」

あたしは搾り出すようにやっと言った。

あたしを見つめていたおばさんの目から涙が溢れた。
おばさんは目を押さえてバスルームから出て行った。
あ、ヤバ……。。

「恵理花。」

パパの声がした。

ピシヤリと音がして、パパの手があたしの頬を打った。

「自分が何を言ったか分かってるのか？」

なにこのチープな展開？

よくあるドラマみたいじゃん。

笑ってやろうと思ったのに、何故か涙が溢れ出し止らなくなった。
もうヤダ！

「パパなんか大嫌い！」

あたしはドラマでよくあるチープな台詞を吐き、階段を駆け上がった。

ドラマって上手くできてるんだな。

だってこの状況になったらやっぱりこの展開になっちゃうんだから。

あたしは部屋に飛び込み鍵を掛けると、ベッドにうつぶせになった。
枕が涙で湿ってくるまであたしは動かなかった。

第3話

コンコン。

ドアをノックする音がした。

「パパ？」

あたしはむくつと起き上がる。

パパはなんだかんだでいつも最後は心配してくれる。

「・・・ごめん。パパじゃない。透ですけど。」

あたしはベッドに倒れた。

何しに来たんだか、アキバ男。

「何か用？」

あたしはつつけんどんに怒鳴る。

「大丈夫かなと思って。湿布持ってきました。」

はあ？

余計なお世話だし。

てか、誰のせいだと思ってるの？

「開けてもらっていいかな？ 渡したらすぐ戻るし。」

「……………」

まあ、いいか。

あたしは起き上がってドアの前に立った。
鍵を開けてそつとドアを開く。

目の前にバスローブを着たままのアキバ男がいた。

「・・・？早く湿布ちようだいよ。」

アキバ男はにつこり笑うと、いきなりバスローブを左右に開いた。
あたしの目の前に痩せた白い裸体が忽然と現れる。
そして見るともなく目に入った下半身・・・！

「ぎゃっ・・・・・・・・！！！！むむむむ・・・」

大声を上げかけたあたしの口をアキバ男の大きな手が塞いだ。
みかけによらずすごい力だ。

「声出すなよ。あんたに話がある。」

アキバ男は笑って言った。
つて、笑うとこじゃないでしょー！

「ムガっ！ムガっ！」

あたしの口を押さえたままアキバ男は部屋に侵入してドアを閉めた。
そのままあたしは羽交い絞めにされる。
耳元でアキバ男の低い声がした。

「騒がないでくれるなら放すけど？騒ぐなら、しばらくこうしてる
しかないな。」

あたしはうんうんうん、と首を縦にブンブン振った。

締め付けてた力が緩んで、あたしは腕からすり抜けた。

バスローブを締めなおして、アキバ男はあたしを見下ろしている。

「言いたいことが二つある。」

につこり笑いながら静かな声で言った。

あ、あれ？

逆襲に来たんじゃないのかな？

「オレは風呂で眼鏡を掛けないから、あんたのことは全然見えてなかったんだけど。完全にオレが加害者になってるからな。これであんたもオレの裸見たってことで、チャラにして欲しい。」

「チャラ？お、男と女じゃ、裸の価値が違っでしょ？」

あたしは何か反撃したくてとりあえず言ってみた。

「・・・そういうと思った。だから後は回数で帳尻合わせて欲しい。」

真面目な顔で言うとアキバ男はまたバスローブの胸をはだける。

こ、こいつ。

これって作戦？

「もう、いいよ。あんたの裸なんて見たってしょうがないじゃん。」

「そういうと思った。ありがとう。」

アキバ男はまたにっこり笑う。
う……。
やられた。

「もう一つは何よ？」

アキバ男はじつとあたしを見た。

あれ？

なんか眼鏡ないとイケてる？

彼は意外に真面目な顔で語り始めた。

「オレは連れ子だし、はつきり言って邪魔だろうと思う。自覚もあるよ。だからお荷物扱いされても仕方ないし、覚悟してる。

だけど、おかあさんは本当にあんたと仲良くなりたいんだ。

オレのお父さんは早くに死んだから、オレ一人っ子になっちゃったけど、いつも娘が欲しかったって言ってた。

オレのことは無視してて構わない。

でも、おかあさんを傷つけないで欲しいんだ。

あんたの気持ちも分かるから、どうして無理なら仕方ないけど。」

ヲタ系アキバ男がハキハキ語るのをあたしは不思議な気持ちで黙って聞いていた。

なんだ、こいつ今まで猫かぶってたのか。

「無理じゃないよ。あたしもママが欲しかったし……。」

小さな声でポツリと言ってみた。

「なんでム力つくのか良く分かんない。みんなが気を遣って優しくしてくれるのがまたム力つく。
あたしのことがかわいそうに思ってるんじゃないかって思っちゃ
う。」

アキバ男は黙って聞いててくれた。
優しい目だった。

「なんかそれ分かる。オレもお父さんが死んだ時そう思った。皆が
同情してくれるのがウザかったよ。」

そしてあたしの視線に合わせるように体をかがめる。
うわ、顔が近いんですけど。

「でも、そう思うのは自分が自分のことがかわいそうに思ってるか
らじゃないのかな？」

へ？

あたしが？

アキバ男はにっこり笑った。

「あんたはかわいいし、いいパパにも恵まれて、しかも優しいママ
とイケメンの兄貴ができたじゃん。

これからはおかあさんもオレもあんたのこと守ってやるからさ。
あんたは可哀相じゃないし、今まで通りなにも変らなくていい。
甘えてくれれば、オレ達は更に嬉しいけど。

でも、まあ、最初は慣れないよね。
気恥ずかしいのはこっちも同じだよ。」

そして照れたように髪を掻きあげ、あははと笑った。

あたしは果然と彼を見上げていた。
そっか。

あたしのお兄ちゃんになるんだ。
今更ながら気が付いた。

アキバ男は右手を差し出した。

「実はオレも妹欲しかったんだ。お兄ちゃんって呼んでくれたら萌えるけど。」

う……やっぱりヲタ系？

でも、あたしはその大きな手を握り返した。

なんかが吹っ切れた気がして、胸がスーっとする。

貯まっていた物が吐き出された感じ。

今まで自分でも気付かなかった気持ちをつ分かってくれた。

つまりアキバ男もずっとあたしと同じ思いしてきたんだ。

考えたら、この人も同じ境遇だしね。

あたしはそれが嬉しかった。

「お兄ちゃんは勘弁。アニキでいい？」

「……ツンデレな感じで、それもアリかな。」

アキバ男はにっこり笑った。

大きな手は温かくて、力強かった。

「改めて、兄の透です。これからよろしく。」

第3話（後書き）

お付き合いありがとうございました。
楽しんで頂ければ幸いです。（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6395n/>

ブラザーシップ

2010年11月2日13時56分発行